

（第十五回）

堂地統

年に及び、称家十八代重張の代に至り豊田秀吉の命により日置郡吉利村に領土を移されたのである。其の間四代までは佐多町郡の高木城を居城とし、五代より十七代までは根占町川南富田城を居城とした一時城内即ち国見城に居を構えた事もある。領有の土地も時代により広狭の差があるが、室町時代に於ては、大根占、根占、左多、田代

清俊
清成
清有
清久
清平
清一
清忠
清重
清年
重長
重就
重吉
重和
重丸
重水
重雄
重純
重政
福寿丸
清水
清香
安三
清行
清方
清春
清車
重春
帯
清藤
清康
清泉
重春
帯
清藤
清康
清泉
重春
帯

三 称家氏の大関入国

刀 從志（現当主）

其の年十一月相模國田越川畔にてある運命にあつた。

清重は南の果て大隈にあつて無き方々へ、亡父高橋の冥福を為るため一寺を創建し「勝雄寺」と名けた。寺は後吉利寺改易と同時に移転されたが、根占町北之口にの寺跡が現存し七百年前の名残といわれている。

平家滅亡の時、源氏の正統重盛の嫡男、維盛には六代といふ子供があつた、時に年十二才で母と共に京都の遍照寺のそばにある葛蒲谷にかくれてゐた。源氏に於ては其の殘党をくまなく探した。北条時政は頼朝の下知を受けて葛蒲谷にかくれてゐた平六代をとりこしたのである。六代の乳母は幼きこの公達に助命を請うべく隠匿に奔走した時に頼朝の崇信せる文童上人が山城国高雄山神護寺に居られるき、神護寺におもむき事の次第を訴へ、助力を懇願した。文童上人も六代の身の上をあわれみ、遂にゆる其の助命を再三懇請し、遂にゆるしを得て六代は其の後妙覺と改し、世に三神師と称してゐた。

四、初親王、日養、時代
大隅入国は佐多町郡の高木城をさう百年間には佐多町郡の高木城をさうした事は前述の通りで、其のち藥師も郡に現存している。さて鎌倉幕府の命を受けて入国したとき、源氏の威令が国土の末端で及んでゐたわけではなく、地味の豪族の勢力はあなまり難く、其の創業は決して安易なものではなかつた。其の難関の一つは南院、南院は源氏以前は南無宗能との領土相論に関する解決でも、南院は源氏以前は南無宗能が之を領してゐたが其の死亡後、源氏に傾した為、先きの領主、重延の子重能は父の旧領なりと称し鎌倉に訴えた。源氏清重は上皇

六代の謀反を恐れて遂にこれをと
の勝利となつた。然し二代清忠の
代に父もや相論となり、同じく勝

※

社寺境内などで空氣銃を射つのはやめまし
は絶対口を向けない、習慣をつかまし

域内などでは空気を射つのはやめまし
 対に銃口を向けない習慣をつけましよ

住である。

一六 喜びは如何ばかりであろうか、

武井、中間、池水、池田、片上坂

著し其の後佐多郡の高木城に移り

斜木の両氏も到着し後見職となつ

主建部清房の女をめぐり、建部の

其の年十一月相模国田越川畔に

此の運命にあつた
青重は南の果て大隅にあつて無念

やる方なく亡父高清の冥福をた
る爲め一寺を創建券准寺と名づ

けた。寺は後吉利寺改易と同時に

の寺跡が現存し七百年前の名残を

四、祢寝氏創業時代

そ百年間は佐多町郡の高木城を

墓碑も郡に現存している。さて

言へ、源氏の威令が国土の末端まで

の豪族の勢力はあなとり難く、其

かつた。其の難関の一つは曾木重

る。南侯院は称寝氏以前は曾木重

棟野氏が領した為に、先きの領主

し鎌倉に訴えた。称寝清重は上京

の勝利となつた。然し二代清忠の

訴となつたが、帰途近江国の駅舎に

は死亡する大事件が起つてゐる。

この豐木氏との相論は百六年間を

ようやく解決を見た次第である。

濟綱の代には当地方の名主等が其

其の命に服する様にとの下知を出

あつた。更に四代清親の代にわ、

博多の海浜に其の武名をとどろか

